

# 言語間の類似と相違を捉えるための 機能主義的観点

—場所を表す「に」と「で」、限定詞「この」と「その」を例に—

一橋大学国際教育センター教授 庵 功雄

isaoiori@courante.plala.or.jp

<http://www12.plala.or.jp/isaoiori/>

# 1. はじめに

- ▶ 言語を分析／比較する際の視点としての機能主義 (functionalism)
- ▶ 発表者は、ハリディ (Halliday, M.A.K) の機能主義にsympathyを持つ立場からの言語分析を行っている
- ▶ 本講演の目的：
  - ▶ 1. 言語の分析における視点としての機能主義
  - ▶ 2. 言語の比較における視点としての機能主義

# 本発表の目的

- ▶ 1. 言語の分析における視点としての機能主義
- ▶ 2. 言語の比較における視点としての機能主義

## 2. 言語の分析における視点としての 機能主義—場所を表す「に」と「で」を例に

- ▶ 場所を表す格助詞「に」と「で」
  - ▶ ・机の上 {に/\*で} 本がある。
  - ▶ ・太郎が喫茶店 {\*/に/で} 本を読んでいる。
- ▶ →学習者の誤用が多い
- ▶ 第二言語習得で多く取り上げられてきたテーマ (cf. Hasuike 2016)
- ▶ →機能主義的に考えると？

## 2. 言語の分析における視点としての 機能主義—場所を表す「に」と「で」を例に

- ▶ 場所を表す格助詞「に」と「で」
- ▶ <類義表現と有標－無標>
- ▶ 形式AとBが相補分布をなし、文脈XではAだけが使え、文脈Y (= not X) ではBが使えるとき、類義表現AとBは次の規則で記述できる (庵2015, 2016, 2017)
- ▶ 文脈X →形式A (有標)
- ▶ 文脈Y (not X) = それ以外の場合→形式B (無標)

## 2. 言語の分析における視点としての 機能主義—場所を表す「に」と「で」を例に

- ▶ 場所を表す格助詞「に」と「で」
- ▶ 機能主義的に考えると？
- ▶ 「に」と「で」（暫定的）（cf. 益岡・田窪1992）
- ▶     (1) に：存在の場所を表す
- ▶         で：動作、出来事の場所を表す
- ▶ →これだけなら簡単なはずだが...

## 2. 言語の分析における視点としての 機能主義—場所を表す「に」と「で」を例に

- ▶ 場所を表す格助詞「に」と「で」
- ▶ <類義表現と有標－無標>
- ▶ 文脈X →形式A（有標）
- ▶ 文脈Y = それ以外の場合→形式B（無標）
- ▶ (例) 文脈指示のソとア
- ▶ A : 昨日、山田に会ったよ。 {あいつ/#そいつ} 相変わらず、元気だった。
- ▶ B : {あいつ/#そいつ}、いつも元気だよな。
- ▶ A : 友人に山田という男がいるんですが、 {#あいつ/そいつ} 面白いんですよ。
- ▶ B : {#あの人/その人}、どんな仕事をしてるんですか。

## 2. 言語の分析における視点としての 機能主義—場所を表す「に」と「で」を例に

- ▶ 場所を表す格助詞「に」と「で」
- ▶ <類義表現と有標－無標>
- ▶ (例) 文脈指示のソとア
- ▶ 文脈X (話し手も聞き手も先行詞を知っている) → 形式A (ア) (有標)
- ▶ 文脈Y = それ以外の場合 → 形式B (ソ) (無標)
- ▶ →この形で記述できれば、実質的には1つの規則だけで十分



## 2. 言語の分析における視点としての 機能主義—場所を表す「に」と「で」を例に

- ▶ 場所を表す格助詞「に」と「で」
- ▶ 「に」と「で」（暫定的）（cf. 益岡・田窪1992）
- ▶ (1) に：存在の場所を表す
- ▶       で：動作、出来事の場所を表す
- ▶ → 「有標－無標」で捉え直すと、
- ▶ (2) に：存在の場所を表す       （有標）
- ▶       で：それ以外の場所を表す（無標）
- ▶ → 「存在」が定義できればよい

## 2. 言語の分析における視点としての 機能主義—場所を表す「に」と「で」を例に

- ▶ 場所を表す格助詞「に」と「で」
- ▶ (2) に：存在の場所を表す (有標)
- ▶ で：それ以外の場所を表す (無標)
- ▶ → 「存在」が定義できればよい
- ▶ (3) 机の下 {に/\*で} 猫がいる。
- ▶ (4) テーブルの上 {に/\*で} みかんがある。
- ▶ (5) あそこ {に/\*で} 財布が落ちている。
- ▶ (6) 鉄棒 {に/\*で} 子どもたちがぶら下がっている。
- ▶ (7) 公園の前 {に/\*で} 車が止まっている。
- ▶ (8) あそこ {\*に/で} 男の子がアイスクリームを食べている。
- ▶ (9) 鉄棒 {\*に/で} 子どもたちが遊んでいる。
- ▶ (10) 公園の前 {\*に/で} 女の子が泣いている。

## 2. 言語の分析における視点としての 機能主義—場所を表す「に」と「で」を例に

- ▶ 場所を表す格助詞「に」と「で」
- ▶ (2) に：存在の場所を表す (有標)
- ▶ で：それ以外の場所を表す (無標)
- ▶ → 「存在」が定義できればよい
- ▶ (5) あそこ {に/\*で} 財布が落ちている。
- ▶ (6) 鉄棒 {に/\*で} 子どもたちがぶら下がっている。
- ▶ (7) 公園の前 {に/\*で} 車が止まっている。
- ▶ (8) あそこ {\*に/で} 男の子がアイスクリームを食べている。
- ▶ (9) 鉄棒 {\*に/で} 子どもたちが遊んでいる。
- ▶ (10) 公園の前 {\*に/で} 女の子が泣いている。

## 2. 言語の分析における視点としての 機能主義—場所を表す「に」と「で」を例に

- ▶ 場所を表す格助詞「に」と「で」
- ▶ (2) に：存在の場所を表す (有標)
- ▶ で：それ以外の場所を表す (無標)
- ▶ → 「存在」が定義できればよい
- ▶ → 「存在」：「要するに、「いる／ある」だ」
- ▶ → (11) 「～ている」から「～て」を削除しても、ほぼ同義→「存在」
- ▶ そうではない (= 「～て」を削除すると、意味が変わる) → 「存在」ではない
- ▶ (5') あそこ {に／\*で} 財布が落ちている。
- ▶ (6') 鉄棒 {に／\*で} 子どもたちがぶら下がっている。
- ▶ (7') 公園の前 {に／\*で} 車が止まっている。
- ▶ (8') あそこ {\*に／で} 男の子がアイスクリームを食べている。
- ▶ (9') 鉄棒 {\*に／で} 子どもたちが遊んでいる。
- ▶ (10') 公園の前 {\*に／で} 女の子が泣いている。

## 2. 言語の分析における視点としての 機能主義—場所を表す「に」と「で」を例に

- ▶ 場所を表す格助詞「に」と「で」
- ▶ (2) に：存在の場所を表す (有標)
- ▶ で：それ以外の場所を表す (無標)
- ▶ → 「存在」が定義できればよい
- ▶ → 「存在」：「要するに、「いる／ある」だ」
- ▶ → (11) 「～ている」から「～て」を削除しても、ほぼ同義→「存在」
- ▶ そうではない (= 「～て」を削除すると、意味が変わる) → 「存在」ではない
- ▶ (5') \*あそこに財布が落ちている。
- ▶ 「～ている」は**文法化**している
- ▶ ex. 犬が {いる／\*ある} 。 / 財布が {\*いる／ある} 。
- ▶ 犬が鳴いている。 / 財布が落ちている。
- ▶ → (5) あそこに財布が落ちている。
- ▶ (5'') あそこに財布がある。(実質的な意味)

## 2. 言語の分析における視点としての 機能主義—場所を表す「に」と「で」を例に

- ▶ 場所を表す格助詞「に」と「で」
- ▶ (2) に：存在の場所を表す (有標)
- ▶ で：それ以外の場所を表す (無標)
- ▶ →「存在」が定義できればよい
- ▶ (2') に：「いる／ある」、**「要するに、「いる／ある」だ」**
- ▶ で：それ以外
- ▶ ★「～ている」が「要するに、「いる／ある」だ」と言えるかは、**結果残存のテイル形の習得**においても重要 (cf. 陳2009、庵2010、2017、稲垣2013、トッフオリ2017)。
- ▶ (5) あそこに財布が落ちている。
- ▶ →\*落ちた／\*ある。(中国語話者、ブラジル・ポルトガル語話者)

## 2. 言語の分析における視点としての 機能主義—場所を表す「に」と「で」を例に

- ▶ 場所を表す格助詞「に」と「で」
- ▶ 「～てある」の場合
- ▶ (12) テーブルの上 {に/\*で} みかんが置いてある。
- ▶ (13) 壁 {に/\*で} 絵が掛けてある。
- ▶ (14) 黒板 {に/\*で} 注意事項が書いてある。
- ▶ →全て「に」
- ▶ →「～てある」は存在文の特殊な形 (益岡1987、張2006)
- ▶ → (13') There is a picture on the wall.
- ▶ (13'') \*壁に絵がある。(意味はわかるが非文法的)
- ▶ → (13') を補うために存在するのが「～てある」
- ▶ →現行の日本語教育における「～てある」の扱い方（「～てある」を自他の対応と結びつける）は根本的に誤り (cf. 中俣2011)

## 2. 言語の分析における視点としての 機能主義—場所を表す「に」と「で」を例に

- ▶ 場所を表す格助詞「に」と「で」
- ▶ 「～てある」の場合
- ▶ (13) 壁に絵が掛けてある。
- ▶ → (13') There is a picture on the wall.
- ▶ (13'') \*壁に絵がある。(意味はわかるが非文法的)
- ▶ → (13') を補うために存在するのが「～てある」
- ▶ 「～ている」の場合
- ▶ (5) あそこに財布が落ちている。
- ▶ → (5') \*あそこに財布がいる。(意味はわかるが非文法的)
- ▶ (5'') あそこに財布がある。(←文法化)
- ▶ (5) 「～ている」(存在を含意する結果残存)
- ▶ → (5) (13) を「いる／ある」で表現できないために動詞を補う必要がある
- ▶ →日本語の方が有標なのは？
- ▶ →学習者の母語と日本語の対照から、習得研究の類型的論的含意が予測できる可能性



# 本発表の目的

- ▶ 1. 言語の分析における視点としての機能主義
- ▶ 2. 言語の比較における視点としての機能主義

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 限定詞 (determiner) 「この」と「その」
- ▶ →テキストの結束性 (cohesion) に貢献
- ▶ (15) ある文がその文だけでは解釈が完結しない要素を内包しているとき、その文は先行／後続する文 (連続) に解釈を依存しており、そのことによってその文連続は全体でテキストを構成する。この場合、その文連鎖は「結束的 (cohesive)」であり、そのテキストには「**結束性 (cohesion)**」が存在する。
- ▶ **結束装置 (cohesive device)** : 結束性を作る文法的装置
- ▶ (16) a. 指示詞 (文脈指示用法)
- ▶ b. 1項名詞
- ▶ c. 項の非出現 (=ゼロ代名詞) (いわゆる「省略」)
- ▶ d. のだ、わけだ、からだ

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 限定詞 (determiner) 「この」と「その」
- ▶ 結束装置 (cohesive device) : 結束性を作る文法的装置
- ▶ (16) a. 指示詞 (文脈指示用法)
- ▶ b. 1項名詞
- ▶ c. 項の非出現 (=ゼロ代名詞) (いわゆる「省略」)
- ▶ d. のだ、わけだ、からだ

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 限定詞 (determiner) 「この」と「その」
- ▶ 結束装置 (cohesive device)
- ▶ (16b) **1項名詞** (庵2007、Iori 2013)
- ▶ → 「～の」を必須項として取る名詞
- ▶ 弟、結果、首相、国語、作者...
- ▶ 「～の」を必須項としては取らない名詞 (**0項名詞**)
- ▶ リンゴ、日本語、作家...

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

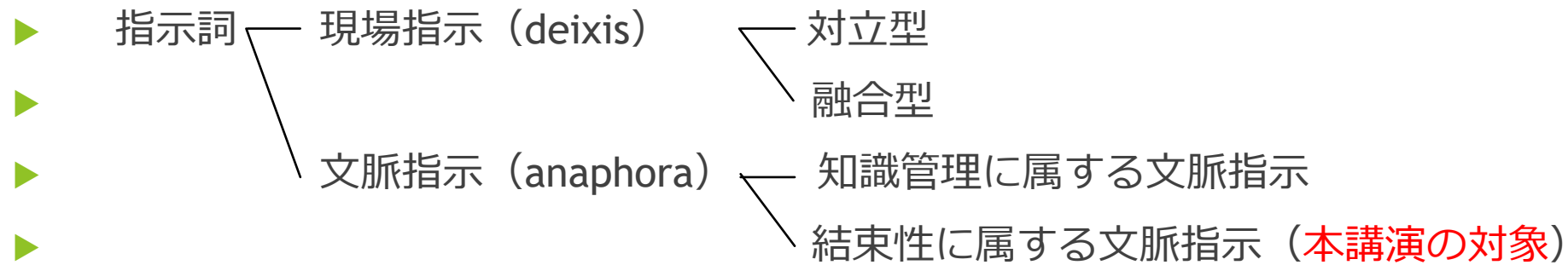
- ▶ 限定詞 (determiner) 「この」と「その」
- ▶ 結束装置 (cohesive device)
- ▶ (16c) **項の非出現** (=ゼロ代名詞) (いわゆる「省略」)
- ▶ ←日本語におけるいわゆる「(項の) 省略」は、「省略」ではなく、「**ゼロ代名詞**」 (=音形ゼロの代名詞) がそこに存在すると見なすべき (Kuroda 1965)
- ▶ 最も予測性が高い形式はゼロ代名詞になりやすい (Givón ed.1983、Givón 1984)

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 限定詞 (determiner) 「この」と「その」
- ▶ 結束装置 (cohesive device)
- ▶ (16d) のだ、わけだ、からだ
- ▶ ← 「文末の接続詞」 (石黒2008)

# 3. 言語の比較における視点としての機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.1 指示詞の文脈指示用法 (庵1994、2007)



### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.2 「この／その」の2つの用法（庵2007）
- ▶ (17) 先日銀座で寿司を食べたんだが、{この／その} 寿司はおいしかった。（指定指示）
- ▶ (18) 先日銀座で寿司を食べたんだが、{この／その} 味はよかった。（代行指示）
- ▶ →本講演では「指定指示」を扱う



# 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3 指定指示の「この」「その」と「定冠詞」
  - ▶ 指定指示の「この/その」を、定冠詞を持つ言語の「**定冠詞**」との比較を視野に分析
    - ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合
    - ▶ 3.3.2 「その」しか使えない場合
  - ▶ 3.4 「定冠詞」の機能
  - ▶ 3.5 「この」が定冠詞か「その」が定冠詞か

# 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3 指定指示の「この」「その」と「定冠詞」
  - ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合
  - ▶ 3.3.2 「その」しか使えない場合
- ▶ 3.4 「定冠詞」の機能
- ▶ 3.5 「この」が定冠詞か「その」が定冠詞か

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合
  - ▶ 1-a : 言い換え（上位型）
  - ▶ 1-b : 言い換え（内包型）
  - ▶ 2 : ラベル貼り
  - ▶ 3 : 遠距離照応
  - ▶ 4 : トピックとの関連性が高い場合

# 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合
  - ▶ 1-a : 言い換え (上位型)
  - ▶ 1-b : 言い換え (内包型)
  - ▶ 2 : ラベル貼り
  - ▶ 3 : 遠距離照応
  - ▶ 4 : トピックとの関連性が高い場合

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

#### ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合

##### ▶ 1-a : 言い換え（上位型）

- ▶ (19) 私はクリスマスにキリスト教の洗礼を受けたので、この（#その）祝日には特別の思いがある。

▶ クリスマス→祝日

##### ▶ 1-b : 言い換え（内包型）

- ▶ (20) 今日の政治で重要な対立軸は、伝統的な右派對左派ではない。（中略）

- ▶ ドイツは一つのテストケースだ。かつてナショナリズムによって滅ぼされたこの（#その）国は、欧州主義を足がかりに安全保障と繁栄を手に入れた。豊かな民主国家の中でドイツほど、ルールに基づく開かれた国際体制に依存している国はほかにない。

▶ ドイツ→かつてナショナリズムによって滅ぼされた国

# 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合
  - ▶ 1-a : 言い換え（上位型）
  - ▶ 1-b : 言い換え（内包型）
  - ▶ **2 : ラベル貼り**
  - ▶ 3 : 遠距離照応
  - ▶ 4 : トピックとの関連性が高い場合

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合

▶ 2: ラベル貼り

▶ (21) 図から7五歩。この手を予想された方は大いに自慢されたい。「終盤は駒の損得より速度」の例題にぴったりだ。序盤では一歩得のために三手ぐらいかけるのに、終盤の現在だと二手と馬の交換ならオンの字というしだい。この (#その) 価値の転換をインプットする難しさが、コンピューター将棋の最大難関だそう。

▶ 序盤では一歩得のために三手ぐらいかけるのに、終盤の現在だと二手と馬の交換ならオンの字

▶ →価値の転換 (ラベル)

# 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合
  - ▶ 1-a : 言い換え（上位型）
  - ▶ 1-b : 言い換え（内包型）
  - ▶ 2 : ラベル貼り
  - ▶ **3 : 遠距離照応**
  - ▶ 4 : トピックとの関連性が高い場合



### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

#### ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合

#### ▶ 3：遠距離照応

- ▶ (22) ソリブジン発売後、最初の死亡報告例となり、今回のインサイダー取引を生むきっかけになった神奈川県内の女性（当時64）の次女は、複雑な胸中をのぞかせる。母親が带状疱疹にかかったとき、服用していた抗がん剤について「相互作用がこわいから、医師に見せた方がいいわよ」と言った。**医師**は、母親が持参した抗がん剤をカルテに控えながら、ソリブジンの投与を続けた。
- ▶ 「もちろん、治療段階で死亡例を隠していたことや、母の死の情報をもとに、株を売り抜けていた社員には怒りを感じる。でも、騒ぎのおかげで、医師の責任が軽んじられていくようで、やりきれない」
- ▶ 日本医師会は、この薬害事件直後「事故の責任はあげて製薬会社が負うべきだ」として、責任の一切を製薬会社に押しつける文書を各都道府県の医師会に配布した。この (??その) 医師は、この文書を根拠に、今でも、補償交渉の場に出てこない。

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合
  - ▶ 1-a : 言い換え（上位型）
  - ▶ 1-b : 言い換え（内包型）
  - ▶ 2 : ラベル貼り
  - ▶ 3 : 遠距離照応
  - ▶ 4 : トピックとの関連性が高い場合

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合
- ▶ 4: トピックとの関連性が高い場合
- ▶ (23) 24日午前8時40分ごろ、大阪府寝屋川市のアパートの男性(20) 方風呂場で、
- ▶ この(\*その)男性の知人で大東市の無職Aさん(23)が死亡しているのを、Aの別の知人から連絡を受けた寝屋川署員が見つけた。

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合
- ▶ 4：トピックとの関連性が高い場合
- ▶ (24) テキストの内容を1名詞句で要約する際、その名詞句をトピックと呼ぶ。トピックを構成する各要素はそのトピックとの関連性が高いと言う。
- ▶ (25) 名古屋・中村署は、殺人と同未遂の疑いで広島市内の無職女性（28）を逮捕した。調べによると、この（#その）女性は20日午前11時45分ごろ名古屋市内の神社境内で、二男（1）、長女（8）の首を絞め、二男を殺害した疑い。
- ▶ トピック：殺人事件
- ▶ トピックとの関連性が高い名詞句：殺人者、被害者、殺人現場／日時...

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合（共通点）
- ▶ 先行詞はテキストにおいて**顕著 (salient)** でなければならない
- ▶ →・言い換え
- ▶ (26) 私は**紅茶**が好きだ。 {この/#その/#φ} 飲物はいつも疲れを癒してくれる。
- ▶ ・ラベル貼り（「言い換え」の一種）
- ▶ ・遠距離照応
- ▶ ・トピックとの関連性が高い場合
- ▶ (27) 先行詞がトピックとの関連性が高い要素のときは「この」しか使えない
- ▶ (28) 「この」はテキスト送信者（話し手／書き手）が先行詞をテキストのトピックとの**関連性**という観点から捉えているのを示す**マーカー**である

# 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3 指定指示の「この」「その」と「定冠詞」
  - ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合
  - ▶ 3.3.2 「その」しか使えない場合
- ▶ 3.4 「定冠詞」の機能
- ▶ 3.5 「この」が定冠詞か「その」が定冠詞か

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3.2 「その」しか使えない場合 (庵1997, 印刷中a)
- ▶ (29) J子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。
- ▶ {その/??この/#φ} J子が今は他の男の子供を二人も産んでいる。
- ▶ (30) ことしは歴史や時代を考えさせる出来事がとくに多い。日本では「昭和」が終わった。今月1日はナチス・ドイツ軍のポーランド侵攻で第2次世界大戦が始まって50周年だった。その (??この/??φ) ポーランドで、いま、民主化が進みつつある。回顧の感慨は、ひときわ大きい。コール西独首相の記念演説の言葉が印象的だった。
- ▶ <特徴> ・ 先行詞は固有名詞であることが多い
- ▶ ・ 主語は（「は」ではなく）「が」でマークされるのが普通

### 3. 言語の比較における視点としての機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3.2 「その」しか使えない場合（庵1997, 印刷中a）
- ▶ テキスト的意味（←長田1984「持ち込み」）
- ▶ (31) 昨日友達と映画を観た。その映画は面白かった。
- ▶       その映画：「昨日友達と見た」映画
- ▶       →テキスト的意味：昨日友達と見た
- ▶ (29) J子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。
- ▶ {その/??この/#φ} J子が今は他の男の子供を二人も産んでいる。
- ▶       テキスト的意味：「あなたなしでは生きられない」と言っていた
- ▶       →これは「その」でしかマークできない
- ▶ (32) 「その」はテキスト送信者（書き手／話し手）が先行詞を定情報名詞句へのテキスト的意味の付与という観点から捉えていることを示すマーカーである



### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 「この／その」の特徴付け
- ▶ (33) この：外延的限定詞 (denotational determiner)
- ▶ その：内包的限定詞 (connotational determiner)

# 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3 指定指示の「この」「その」と「定冠詞」
  - ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合
  - ▶ 3.3.2 「その」しか使えない場合
- ▶ 3.4 「定冠詞」の機能
- ▶ 3.5 「この」が定冠詞か「その」が定冠詞か

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

#### ▶ 3.4 「定冠詞」の機能

- ▶ **定冠詞** (definite article) : 名詞句の**定性** (definiteness) をマークするデフォルトの (defaultative) 統語的手段 (syntactic device)

- ▶ (34) フレッドが教室である面白い本の議論をしていた。私はその後、彼と {その/この/φ} 本について議論をした。

- ▶ (35) Fred was discussing an interesting book in his class. I went to discuss {the/ this / \*φ} book with him afterwards.

- ▶ →日本語では「**定情報名詞句** (definite information NP) 」をゼロでマークしうるが、英語 (などの「定冠詞」を持つ言語) では、これは不可能

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

#### ▶ 3.4 「定冠詞」の機能

#### ▶ 「定冠詞」とはどのような語か

▶ (36) φ首相が辞任した。（「首相」は1項名詞）

▶ 日本人が日本で発話→安倍氏、ドイツ人がドイツで発話→メルケル氏

▶ 「項」である「~の」の値が「デフォルト的」に決まる

▶ (36') {#この/#その} 首相が辞めた。

▶ これは英語の (37) (37)'の対比と同様

▶ (37) The Prime Minister has resigned.

▶ (37') {#This/#That} Prime Minister has resigned.

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.4 「定冠詞」の機能
- ▶ 「定冠詞」とはどのような語か
- ▶ (36) φ首相が辞任した。（「首相」は1項名詞）
- ▶ (36') {#この/#その} 首相が辞めた。
- ▶ (37) The Prime Minister has resigned.
- ▶ (37') {#This/#That} Prime Minister has resigned.
- ▶ (38) {The / #This / #That} longest river in Japan is the Shinano River.
- ▶ →下線部は「論理的デフォルト的定 (Logical and defaultative definite. LDD) 」

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

#### ▶ 3.4 「定冠詞」の機能

	論理的デフォルト的定 (LDD)	定情報
日本語	ゼロ	ゼロ／この／その
英語	定冠詞	定冠詞／指示詞

- ▶ LDDを表しうる限定詞を「**統語的定冠詞** (syntactic definite article)」と呼ぶ (cf. Higginbotham 1996、坂原2000)
- ▶ →日本語には「統語的定冠詞」は存在しないが、「定冠詞」は存在する

### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.4 「定冠詞」の機能
- ▶ 定冠詞と「唯一性条件」
- ▶ 定名詞句の**唯一性条件**（小田2012）
- ▶ (39) 聞き手が、ただ1つの関与的なNが曖昧性なく区別できるような局所的な談話領域または解釈領域を再構築することができる**とき**定名詞句を使用できる
- ▶ (36) φ首相が辞任した。（「首相」は1項名詞）
- ▶ (37) The Prime Minister has resigned.
- ▶ 「首相／Prime Minister」の指示対象は、その文脈で「最もあり得る解釈」として決定される

# 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.3 指定指示の「この」「その」と「定冠詞」
  - ▶ 3.3.1 「この」しか使えない場合
  - ▶ 3.3.2 「その」しか使えない場合
- ▶ 3.4 「定冠詞」の機能
- ▶ 3.5 「この」が定冠詞か「その」が定冠詞か



### 3. 言語の比較における視点としての 機能主義—限定詞「この」と「その」を例に

- ▶ 3.5 「この」が定冠詞か「その」が定冠詞か
- ▶ (40) 私は**紅茶**が好きだ。 {この/#その/#φ} 飲物はいつも疲れを癒してくれる。 (= (26) )
- ▶ (41) **J子**は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。
- ▶ {その/??この/#φ} J子が今は他の男の子供を二人も産んでいる。 (= (29) )
- ▶ ・「この」は指示対象の同定 (identification) のみに使える
- ▶ ・「その」はテキスト内の属性をマークする
- ▶ (33) この : **外延的限定詞** (denotational determiner)
- ▶ その : **内包的限定詞** (connotational determiner)
- ▶ → 「この」は「**唯一性条件**」を満たす
- ▶ → 「この」は「**定冠詞**」 (「**機能的定冠詞** (functional definite article) 」)

## 4. 言語の分析／比較における機能主義的観点の有効性

- ▶ 本講演では2つの言語現象について、機能主義的観点から考察
  - ▶ 「に」と「で」：言語の**分析**における機能主義的観点の有効性
  - ▶ 「この」と「その」：言語の**比較**における機能主義的観点の有効性

## 4. 言語の分析／比較における機能主義的観点の有効性

- ▶ 4.1 形式主義と機能主義
- ▶ (42) 形式主義的文法研究では「これらの形式はどのような意味を表すか」が問題になるのに対し、**機能主義的文法研究**では「**これらの意味はどのように表現されるか**」が問題となる。Halliday(1994:xiv)
- ▶ →こうした観点は、言語の分析だけでなく、言語の比較にも有効

# 4. 言語の分析／比較における機能主義的観点の有効性

- ▶ 4.2 言語の比較における機能主義的観点
- ▶ ハリディの主張にそくして、機能主義的観点から言語の比較を行ううえで、次の点に留意する必要がある
- ▶ (43) **2つ（以上）の言語に共通する意味的領域を設定し、共通する「意味」がそれぞれの言語で、どのように統語的に実現しているかを考察する**
- ▶ <注意点>
- ▶ 比較対照する言語間における構造上の対応関係をアプリオリに前提とすることができない（⇔形式主義的対照研究）（cf. 井上2013）

## 4. 言語の分析／比較における機能主義的観点の有効性

- ▶ 4.3 ハリディの機能主義の日本語への適用可能性
- ▶ 庵（2007：第9章）：Halliday & Hasan(1976)の「指示」と「代用」の区別が日本語の「この」と「その」の分析にも有用であることを実証的に示す
- ▶ →ハリディの枠組みを日本語に適用するには、それに合った検討が必要
- ▶ ←構造の同一性がアプリアリに前提できるわけではない

## 5. おわりに

- ▶ 本講演では、言語の分析、および、対照研究における機能主義的観点の有効性について論じた。
- ▶ ハリディの文法理論は、アメリカを除く国や地域においては有力な言語理論として広く受け入れられている。その背景には、この理論の扱う射程が広く、言語教育や自然言語処理といった分野においても応用可能であると見なされていることがある。
- ▶ しかし、日本にはこの理論はほとんど浸透しておらず、日本語に関してこの理論を用いて分析している一部の例も、英語の分析をそのまま日本語に持ち込んでいるだけであるため、日本語の研究にほとんどインパクトを与えていない。
- ▶ ハリディの枠組みを英語以外の言語に適用するためには、英語とその言語の対応関係を研究者が考え、それにそくして分析を行う必要がある。

## 5. おわりに

- ▶ 発表者は、形式主義的観点からの分析を否定するものではない。しかし、言語教育や習得研究を考える際に、三層構造観に立つハリディの言語観を合わせて考えてみることによって、より深い洞察が得られるのではないかと考えている。
- ▶ **ハリディの三層構造観** (Halliday & Hasan 1976)
- ▶ **レジスター** = テキストを定義づけるもの
- ▶ Register
  - ▶ **Field** (出来事。「何について?」)
  - ▶ **Tenor** (発話当事者間の関係性。「誰が誰に?」)
  - ▶ **Mode** (伝達の様式。「どのように?」)
- ▶ Ex. Field (お金を借りる)
- ▶ Tenor (友だち/先輩)
- ▶ Mode (メール/電話/対面)
- ▶ →それぞれの変数の組み合わせによって、実現するテキストが異なる

## 引用文献（主なもの）

- ▶ 庵 功雄（2007）『日本語研究叢書21 日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- ▶ 庵 功雄（2003）「見えない冠詞」『月刊言語』32-10
- ▶ 庵 功雄（2016）「「産出のための文法」から見た「は」と「が」」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版
- ▶ 庵 功雄（2017）『一歩進んだ日本語文法の教え方1』くろしお出版
- ▶ 井上 優（2013）『そうだったんだ！日本語 相席で黙っていられるかー日中言語行動比較論』岩波書店
- ▶ 小田 涼（2012）『認知と指示ー定冠詞の意味論』京都大学学術出版会
- ▶ 陳 昭心（2009）「「ある／いる」の「類義表現」としての「結果の状態のテイル」ー日本語母語話者と中国語を母語とする学習者の使用傾向を見て」『世界の日本語教育』19
- ▶ トッフオリ、ジュリア（2017）「ブラジル・ポルトガル語を母語とする日本語学習者の結果残存のテイルの使用傾向に関する一考察」2016年度一橋大学言語社会研究科修士論文
- ▶ Givón, Talmi(1984) *Syntax I*. John Benjamins.
- ▶ Givón, Talmi(ed.1983) *Topic continuity in discourse*. John Benjamins.
- ▶ Halliday, M. A. K.(1994) *An introduction to functional grammar* (2<sup>nd</sup> Edition). Edward Arnold.
- ▶ Halliday, M. A. K. & Ruquia Hasan(1976) *Cohesion in English*. Longman.
- ▶ Hasuike, Izumi(2017) “On the use of Japanese locative expression with *ni* and *de* by Korean and Chinese speakers”, *Conference Proceedings of PacSLAF2016*.
- ▶ Iori, Isao(2015) “What can the research on Japanese anaphoric demonstrative contribute to general linguistics?”, *Hitotsubashi Journal Arts and Sciences*. 56-1、一橋大学
- ▶ Kuroda, S.-Y.(1965) *Generative grammatical studies in the Japanese language*. PhD. Dissertation, MIT.



ご清聴ありがとうございました